

スコラ・ピロムーソールム 第Ⅱ部 音楽少年アイヌーシュの修行

原 正 幸

登場人物：アイヌーシュ、エニュソルフォス、オクセクナルフ、マヤ、月、
音楽樹、夕焼け、老人

＜第Ⅱ部第1章のあらすじ＞

戦争で両親と兄を失って途方に暮れていた音楽好きの少年アイヌーシュは、生前貿易商を営んでいた父のところに出入りしていたある商人の話を思い出し、音楽名人オクセクナルフが院長をしている音楽学校「スコラ・ピロムーソールム」に入学して音楽のことを勉強しようと決意する。故郷のラシュミ・ジャーラをあとにしてから何十日もかかってピロムーサ・グラマに辿り着き、そこで出会った農夫と樵夫に道を尋ね、漸く音楽聖人ピロムーサを祀った祠と音楽学校を探し当てる。

Ⅱ

アイヌーシュ 仕方ない。ドアを叩いて叫んでみよう。……。「ごめんくださいーい」。やっぱり駄目だ。おやっ。ドアのすぐ右に小さな字で何か書いてある。「ゴヨウノアルカタハコノヒモヲサンカイヒイテクダサイ」。なーんだ。そうだったのか。よーし、一、二、三。…建物の中でトライアングルを打っているような音が鳴り響いている。風変わった呼び鈴…。誰か出て来る足音がする。やっぱり留守じゃなかったんだ。

エニュソルフォス はーい。いまあけます。

アイヌーシュ こんにちは。アイヌーシュというものです。オクセクナ

ルフ先生にお目に掛りたいんですが。

エニュソルフオス どこかお悪いのですか。

アイヌーシュ いいえ、そうではありません。「スコラ・ピロムーソールム」に入学したいのです。

エニュソルフオス 分かりました。どうぞ中へお入りください。院長先生に伝えてきますから、そのソファに掛けて暫くお待ちください。

アイヌーシュ はい。

建物の中はちょっと薄暗いけれど、なんとなく落ち着いた感じがする。滝の音も殆ど聞こえて来ないし。いろんな形をした楽器が置いてある。でも、何故かみんな打楽器ばかりだ。

.....これは...、何の香りだろう...。普通の草の臭いとは違う。多分、天井裏かどこかに薬草が干してあるんだ。麓の村で道を教えてくれた農夫が「学校とはいっても、病院のようなところだ」と言っていたけれど、オクセクナルフ先生は煎じ薬も調合できるのだろうか。「音楽名人」と呼ばれている人が病人を治し薬草までも...。とにかく、よい香りだ。なんだか心まで安まってくるような気がする。

それにしても遅いな。さっき出て来た人は「スコラ・ピロムーソールム」の生徒なのだろうか。僕よりはずっと年上の感じだった。もうここに長くいる人なのだろうか。下の樵夫の話では、入学してもみんな二三ヶ月で逃げ出してしまうということだったのに。稀には、逃げ出さないでここに居続ける人もあるのかも知れない。それとも、さっきの人は生徒ではなくてオクセクナルフ先生の助手かな...。それなら話の辻褄が合うような気がするけれど。

あーあ、眠くなってきたしまった。そんなに体の丈夫な方じゃない僕がよくここまで辿り着けたものだ。全く、あの勾玉を持っていなかったら、途中で行き倒れになっていたかも知れない。ここまで一体何日かかっただろう。ラシュミ・ジャーラ近郊プラプアー・マンダラを出発したのは秋分

が過ぎてからだった。ナーマ・ナデイの河を渡ったのが寒露の頃だった。ナーマ・ニルゴーシャを通過したのが霜降の前日、スヴァアラ・マンダラに着いたのが.....

エニュソルフオス お待たせしました。もしもし。

アイヌーシュ あっ、すみません。つい、居眠りをしてしまいました。

エニュソルフオス お待たせしました。オクセクナルフ先生がお呼びです。こちらへどうぞ。

アイヌーシュ はい。

エニュソルフオス (ノック)

オクセクナルフ おーっ、どうぞ。

アイヌーシュ こんにちは。はじめまして、アイヌーシュ、Zg.と申します。

オクセクナルフ その椅子に掛けなさい。

アイヌーシュ 失礼します。

オクセクナルフ どこから来たかね。

アイヌーシュ ラシュミ・ジャーラから来ました。

オクセクナルフ 「ラシュミ・ジャーラ」というとこの間の戦争で電磁波ミサイルが...

アイヌーシュ そうです。

オクセクナルフ よく助かったな。

アイヌーシュ はい。市立図書館の地下の書庫にいて運良く助かりました。

オクセクナルフ で、君の家族は。

アイヌーシュ 両親と兄は助かりませんでした。三人とも消えてしまいました。

オクセクナルフ そうか。悼ましいことだ。亡くなる前、親御さんは何をされていたかね。

アイヌーシュ 父は小さな貿易商を営んでいました。そして兄が手伝っていました。

オクセクナルフ どうしてここにやって来たのかね。

アイヌーシュ 音楽好きだった肉親たちが無事「音楽の国」へ辿り着いて幸せに暮らせるよう音楽聖人ピロムーサ様にお祈りし、私自身この音楽学校に入って音楽のことを勉強して「本当の音楽とは何か」が分かるようになりたいと思ったからです。

オクセクナルフ なるほど。親御さんたちが音楽好きだったのなら、音楽聖人のことは御存じだったのだろう。そして「音楽の国」のことも。でも、君はこの学院のことをどこで知ったのか。

アイヌーシュ 生前父が貿易商を営んでいたので家にはいろんな国の人たちが出入りしていました。その中にこのシュロートラ・ダートウの奥に広がる高原で採掘した岩塩を駱駝で運搬してラシュミ・ジャーラの港から輸出している商人がいました。その人の口から、このピロムーサ・グラーマには音楽聖人の名に因んだ音楽学校があって、そこの校長先生は大層立派な人で「音楽名人」と呼ばれている、という話を何度か聞いたことがありました。その時は大して気にも留めませんでした。この間の戦争でこんな身の上になってしまい、それまで考えてもみなかったような苦労を色々経験しました。苦労には何とか耐えることができましたが、自分の人生に関してこれからの一生をどうやって生きて行ったらよいか途方にくれて悩んでいた時に、何故か一筋の光明が差し込むように、あの商人の話が記憶の中から蘇ってきて強く私の心を捉えました。それでこのピロムーサ・グラーマまで何とかして行って「スコラ・ピロムーソールム」に入学しようと決心しました。

オクセクナルフ わしが「立派な人間」かどうかは分からんがね、その商人ならよく知っているよ。年に一度ここに岩塩を届けてくれるから。確か、アルカロペーゴスという名前ではなかったかな。

アイヌーシュ そ、そうです。そんな名前の人でした。

オクセクナルフ それはそうとして、さっき君は「本当の音楽とは何かを知りたい」と言ったが、「本当の音楽」というのはどういう意味かね。

アイヌーシュ 音楽は耳に聞こえるものです。でも、人が音楽を聴いている時、音楽を単なる物理的音響現象として聴いているのではありません。自分の好きなジャンルの音楽を聴く時、音楽は人の心を軽やかにし、あるいは励まし、あるいは慰め、疲れた心を癒し、生きる喜びを与えてくれます。聴く人の心にこのような影響力を及ぼすものは音でも、楽器でも、人間としての歌手でもありません。それが何であるのか、今の私には分かりません。言葉を介することもなく、絵画や彫刻のように目を介することもなしに、これ程までに強い力を直接及ぼす音楽を、私は「本当の音楽」と呼びたいのです。

オクセクナルフ すると、君のいう「本当の音楽」とは「聞える音楽」のことなのかね。

アイヌーシュ そうです。

オクセクナルフ ピロムーサの祠のそばに立っている入学案内の看板は見たかね。

アイヌーシュ ちゃんと見ました。でも、「聞えない音楽」なんて本当にあるのか疑問に思いました。音楽は耳に聞こえるものなのに。

オクセクナルフ うわっはっはっはっはっ。正直な子だ。でも、あるんだよ、それが。但し、常識的なものの見方をしてはなかなか気付かないかね。

アイヌーシュ では、どうしたら「聞えない音楽」が聞こえるようになるのですか。

オクセクナルフ それには徐々に訓練して行くほかない。

アイヌーシュ 「聞えない音楽」はこの世界、つまり「見える世界」にはなくて「見えない世界」にはあり得るのですか。

オクセクナルフ 「見えない世界」というと…。

アイヌーシュ 例えば、木は「見える世界」と「見えない世界」の二つ

の世界に跨がって生きています。木の地上にはえている部分は目に見えるのに対して、地中に伸びている根の部分は普通は人間には見えません。しかし、人間の目には見えないからといって根はないと結論することはできないからです。

オクセクナルフ もしかして、君はここへ来る途中樵夫に出会って話を聞かなかったかい。

アイヌーシュ はい。道を尋ねたら荒っぽい感じの人でしたが、ついでにいくつかのことを忠告してくれました。それから「最近御無沙汰しているからオクセクナルフ先生によろしく伝えてくれ」と言っていました。

オクセクナルフ やはり、そうか。あの男はああいう仕事をしているが、なかなか物の分かった人間だ。ここへ来る前に偶然にせよあの男に巡り会えたのはよかった。「聞えない音楽」はこの世界、即ち「見える世界」にではなく「見えない世界」にあるのか、という君の質問はある意味では正しい。もし「見える世界」が常識的に捉えられた世界を意味するのなら。だが、この世界つまり「見える世界」には「見える音楽」もあるし、「聞えない音楽」もある。「聞えない音楽」は実は「見える世界」にもあるのだ。

アイヌーシュ 「見える音楽」……。なんだか、だんだん分からなくなってきました。

オクセクナルフ 「見える音楽」の方は比較的分かり易いから、暫くすれば君にも理解できるようになるだろう。要は、常識的な物の見方に囚われていては道は開けないということだ。今のところは、それが分かればよろしい。

アイヌーシュ ついでに質問しますが、入学案内に書いてあった「自己の内なる海」というのは一体どういうことなのですか。

オクセクナルフ うわっはっはっはっはっ。君は性急だね。「自己の内なる海」、これは「聞えない音楽」より更に難しい。すべてを言葉によって説明し理解するという方法もあろう。だが、君もよく知っている通り、音楽

をすべて言語によって置き換えることは不可能であり、またたとい置き換えたとしても無意味であるように、「聞えない音楽」や「自己の内なる海」を言語化しても無意味だと言っておこう。

ところで、ここは普通の音楽学校とは違うということが君にも少しは分かってきたと思うが、君は何か楽器がひけるかね。

アイヌーシュ テルミンなら家に入出入りしていた人から手ほどきしてもらったことがあります。

オクセクナルフ なに、「テルミン」。あれはいかん。他には。

アイヌーシュ 堅笛を習ったことがあります、あまりうまくありませんでした。

オクセクナルフ じゃ、歌はどうかね。

アイヌーシュ 歌を歌うのは小さい頃から好きでした。

オクセクナルフ それなら何でもいいから、歌ってごらん。

アイヌーシュ ええっ、いまここでうたうのですか。。弱ったな…。

オクセクナルフ 歌の試験じゃないから、別に緊張しなくてもよろしい。何でもいいよ。

アイヌーシュ それじゃ、うたいます。

In nemore vicino

Auditur cuculus.

Nam e quercu buboni

Respondet vocibus:

Cucu, cucu, cucucucu.

Cucu, cucu, cucucucu.

(隣の森で

郭公の声が聞こえる。

樜の木から木菟さんに

こんな声で返事しているよ。

カッコー、カッコー、カッコカッコカッコカッコ。
カッコー、カッコー、カッコカッコカッコカッコ。)

オクセクナルフ なかなかいい声をしているね。でも残念ながら、君の歌は笛を吹いているような歌だ。歌は「ふく」ものものじゃなくて、人の心を「うつ」ものだ。歌はどうして「ウタ」と言われるか、知っているかね。

アイヌーシュ 知りません。

オクセクナルフ そうか。じゃ、教えてあげよう。「ウタ」は聴く人の心をうち、聴いた人は心を「うた」れるからこそ「ウタ」と言われるのだ。人の心をうたなければ、いくら音程が正しくてリズムがよくても「ウタ」ではない。君は古代ギリシアの音楽名人オルフェウスが堅琴を奏でながらうたうと、荒れ狂っている海をも鎮め岩をも感動させたという有名な故事を知らないかね。明日からでも発声練習をするといい。腹から声を出す訓練をしなければいかん。そうしたら、もっと違う、「ウタ」らしいうたい方ができるようになるだろう。

アイヌーシュ はあ.....。

オクセクナルフ 君は頑強な体付きをしているようには見えないけど、力仕事は大丈夫かな。明日から学院の仕事を手伝ってもらおうよ。水汲み、薪割り、薪拾い、掃除、草取り...と慣れるまで大変だと思うけれど。

アイヌーシュ ということは、「スコラ・ピロム・ソールム」に入学できるということですね。

オクセクナルフ その通り。

アイヌーシュ あ、ありがとうございます。

オクセクナルフ 先程も言ったように、何も仕事がない時には、努めて発声練習をするように。それから、毎朝起きたら滝の傍らにある音楽聖人の祠にお参りし、周囲を綺麗に掃き清めること。今日は、あとでお参りに行ってきなさい。

アイヌーシュ ここへ来る時にもうお参りしてきました。石碑に音楽聖人ピロムーサの四守護神の名がありましたが、「サーガラ」とか「アマテルラ」というのは一体何の神様なのですか。「アグリコラ（農夫）」や「ナウタ（船乗り）」がピロムーサの守護神というのはどんな意味なのですか。

オクセクナルフ うわっはっはっはっはっ。君は急ぎ過ぎだ。入学案内の最後にどう書いてあったか覚えているかね。

アイヌーシュ 「フェスティーナ・レンテ（ゆっくり急げ）」。「ムルタ・フィーウント（多くのことがなされる）」。

オクセクナルフ まさしくその通り。

エニュソルフォス （ノック）

オクセクナルフ おーっ。

エニュソルフォス 膝が痛くて歩けなくなったというおばあさんが、息子に背負われて来て治して欲しいと言っています。

オクセクナルフ 中に入って待ってもらいなさい。そうだ、丁度いいや。エニュソルフォス君、この新入生に学院の中を案内してやってくれ給え。それと明日からの仕事を説明してやってから、寝室もついでに教えてやってくれないか。

エニュソルフォス 分かりました。じゃ君、僕についてきて下さい。

アイヌーシュ はい。では、オクセクナルフ先生、失礼します。

オクセクナルフ うむ。「フェスティーナ・レンテ」。「ムルタ・フィーウント」。

エニュソルフォス 君の名は「アイヌーシュ」だったね。僕は「エニュソルフォス」。よろしく。

アイヌーシュ こちらこそ、どうぞよろしく申し上げます。エニュソルフォスさんはこの「スコラ・ピロムーソールム」に入学してからもう長いんですか。

エニュソルフォス 今年で丁度10年目かな。

アイヌーシュ ええっ。10年目…。そんなに年月が経っても卒業できないんですか。

エニユソルフォス 卒業できないんじゃないなくて、この学院には本当は卒業なんてないんだよ。

アイヌーシュ じゃ、あの入学案内に書いてあったことは嘘なのですか。

エニユソルフォス 嘘という訳じゃないんだけど。この学院では死ぬまで、つまり一生が修行なんだよ。

アイヌーシュ 一生が修行…。

エニユソルフォス そう。ここが図書室。音楽に関係のある古今東西の重要な書物なら、何でも揃っているよ。自習もここでするんだ。もっとも、最初のうちは「忙しい」、「眠い」で勉強する余裕なんてとてもないだろうけれど。

アイヌーシュ 天井までぎっしり、随分沢山の本があるなあ。これだけ全部読まないといけないんでしょうか。

エニユソルフォス 全部読む必要なんかないさ。オクセクナルフ先生との問答を手掛かりに、自分にとって必要なものを利用すればいい。肝心なことを理解できずに、たといここにある本を全部読んだとしても何も得られないだろう。

それから、と。ここが食堂。食事は一日に二度。オクセクナルフ先生と一緒に食事をするんだけど、食事の時はお祈りの言葉以外は一切喋ってはいけないんだ。

アイヌーシュ 新入生は食事の準備や後片づけもするんですか。

エニユソルフォス いいや、ここでは食事に関することはマヤおぼさんが全部してくれるんだ。いま、出掛けていていないけれど、彼女は記憶力抜群の女性だよ。この学院のことなら、彼女がここに来てから起ったことは何でも記憶していて、尋ねれば生き字引のようにたちどころに答えてくれるよ。

アイヌーシュ 新入生は食事の準備はしなくてもいいなんて、随分助か

りますね。

エニユソルフオス うん。でも、実のところは、食事を作ることは学院の仕事のうちでも非常に重要なことのひとつと看做されているので、やりたくても新米のうちはやらせてもらえないんだ。

アイヌーシュ ふーん。

エニユソルフオス 今度は外へ出て、仕事場と作業について説明しよう。ここが水汲み場。毎日午前と午後の二回、井戸から水を運んでここにある大きな三つのかめを一杯にしておくこと。井戸は深いし、上手に汲み上げないと途中でこぼれてしまうので、結構重労働だよ。滝のところから水を引いたらよさそうなものだけけれど、オクセクナルフ先生の話では地表を流れる水よりも、やはり地下の水脈から湧き出してくる水の方が体にいいんだそうだ。

アイヌーシュ 足下で、鍾乳洞の中で滴り落ちる水滴のような高い澄んだ響きがあちこちでしていますが、これは何ですか。

エニユソルフオス 君は「水琴窟」という仕掛けを知らないかい。この水汲み場で、一旦は井戸から汲み上げられたにもかかわらず、かめにいれる前にこぼれてしまった水が再び地中に帰って行く時に、この水汲み場の地下、そこは中空になっているんだけど、そこに大きさがそれぞれ異なる八個の陶器製のかめが逆さに伏せて置かれていて、水滴が当たるとそのかめの大きさに応じて響きを発するのさ。これは地中に帰って行く水たちに対する慰めなんだ。今回は役に立ってもらえなかったけれど、そのかわり君たちの素晴らしい響きを楽しませてもらおうよ、という気持ちでね。

アイヌーシュ 役に立たなかった水を響きで慰めるなんて、いかにもこの風変わりな音楽学校らしくていいですね。

エニユソルフオス アイヌーシュ君、新入生にしては結構もの分かりがいいじゃないか。

アイヌーシュ いいえ、そんなことはありません。でも、いつも良い響きを耳にしていると心の栄養になりますよね。

エニユソルフオス 「心の栄養」か。うまい表現だね。

今度は燃料置き場だよ。三日に一度薪割りをして、この三段になっている薪棚を一杯にしておくこと。薪用の木材を適当な長さに鋸で切ってから割るんだけど、これもなかなか骨の折れる仕事だよ。慣れないと斧が丁度いいところに当たらないからね。それから、天気の良い日には裏山の雑木林に行って枯枝を集めてきてこの籠を一杯にしておくこと。焚き付けに使うんだ。裏山へ登って行く途中、丁度滝の向い側に大きな岩があって、そこから滝が一望できる。そこで滝に向かって発声練習をするといいよ。やみくもにどんなに大声を出して叫んでも滝の音に掻き消されてしまっても何も返って来ないけど、コツがあってそれがわかってくると山びこが返って来るようになるんだ。

アイヌーシュ オクセクナルフ先生にも言われたけれど、どうしてそんなに発声練習が重要視されるんですか。

エニユソルフオス それは毎年春の初めにここで行われる「山びこ祭り」のためなんだ。

アイヌーシュ 「山びこ祭り」...

エニユソルフオス そう、このピロムーサ・グラーマの昔からの習慣なのさ。立春になると村中の人たちがみんなあの大岩のところに集まって、オクセクナルフ先生の指揮の下、一斉に滝に向かって「おーっ」と六回叫ぶんだ。みんなの息がよく合っている時には、村人の声が滝にこだましていろんな方角から山びこが返って来て、その山びこ同志が共鳴し合い、えも言われぬ壮麗な響きが暫くの間この谷間に満ちる。そんな時その年は豊作とされる。反対に、みんなが努力しても何故か息が合わない時は、そういう響きは起らず、その年は凶作とされる。あるいは凶作とならないまでも、何かよくないことが起こるとされる。だから、責任重大なのだ。発声が下手だとみんなに笑われるよ。実際、村人の中にはうまい人が幾人もいて、自分独りだけで叫んでも共鳴する山びこを起こせるんだ。秋の「薬酒祭り」、つまり収穫感謝祭の時にはそういう人たちの声自慢大会が開かれ、

一番沢山共鳴する山びこを起こした人にはオクセナルフ先生から表彰状が贈られ、みんなにオクセナルフ先生が仕込んだ薬酒が振る舞われる。村の人たちはみんなそれをととても楽しみにしているんだ。

アイヌーシュ ふーん。そんな習慣なんて迷信じゃありませんか。

エニユソルフオス 確かに、迷信かも知れない。しかし、村の人たちは過去の経験に基づいてそう信じているんだよ。天地間に何か異変があれば、人間界にもその兆候が現れるし、人間界がうまくいっていない時にはそれが天地間にも反映される、そう考えるのはあながち不自然とは言えない。その時の天候とか、滝の水かさといったようなことに左右される面もあるだろうけれど。現に、この間の戦争があった年には共鳴する山びこが全然起らなかったんだ。

滝に向かって叫んでも山びこが返ってこないうちはとても信じられないだろうけれども、ある日山びこが返って来るようになり、更に練習を重ねていくうちに山びこが何回も往復するようになる。この共鳴を体験したら、君もきっと天地間の「ゆらぎ」と「ズレ」を映し出す鏡のような、共鳴する山びこの力が信じられるようになるだろう。但し、それまでには努力と工夫と長い時間が必要だけれどね。

その渡り廊下で繋がっている建物が「オリエンターリア」。

アイヌーシュ 「オリエンターリア」...。「東にあるもの」？

エニユソルフオス そう。トイレのことさ。でも、この学院では「トイレ」と言わないんだよ。二週間に一度汲み取りをすること。そしてあの蓋がかぶせてある肥え溜めに移しておくこと。

アイヌーシュ うへーっ。トイレの汲み取りまでするんですか。参ったな。

エニユソルフオス そんなに言わなくてもいいじゃないか。僕たち人間は毎日沢山の生きものたちの命をもらって生きている。もとは植物や動物の体であったものを調理し、咀嚼し、消化のはたらきによって人間の身体に合うよう生化学的に変形して吸収することによって。だけど、本当に必

要なものとして身体に吸収されるのは食べたものの一部に過ぎず、残りは体外に排泄されてしまう。

自然界では動物たちの排泄物はまた他の動物や昆虫が食べたり、腐敗分解して植物たちの栄養になる。けれども、人間の住む都会では「不衛生」の名の下に浄化槽を介して下水道に流してしまう。これは勿体ない話じゃないか。僕たちの身体に必要なものだけ頂いて、余分なものは大地に、あるいは植物にお返しする。これが理想的じゃないだろうか。

あの肥溜めに移しておくで、村の人たちが取りに来て必要なだけ持って行ってくれる。後になって、できた野菜をお裾分けしてくれるんだ。一部はこの学園でも利用しているけど、ほんの僅かな量で済むよ。

アイヌーシュ すると、トイレの汲み取りばかりか、肥撒きもやらなくちゃいけないということですね。

エニユソルフオス 勿論。アイヌーシュ君、君は排泄物のことをさも忌まわしいことのように思っているけれど、考えてみ給え。一旦身体の外に出ると「臭い」、「穢い」と言って大騒ぎするけれど、出て来る前自分の直腸に納まっている時は、誰も「臭い」とも「穢い」とも思わないじゃないか。綺麗にお化粧して着飾ったどんな才女でも、最新のメカをちらつかせて偉そうにしている電磁奴隷省の役人たちも、みんなこの結構な代物を抱えて歩いていると思えば全く滑稽じゃないか。わっはははは。

アイヌーシュ わっはははは。

エニユソルフオス ね、そうだろう。

アイヌーシュ 分かりました。話はちょっと変わりますが、排泄物を無駄にしないで農業に利用するという事は、もしかして音楽聖人ピロムーサの四守護神の中に「アグリコラ（農夫）」がいることと何か関係があるのですか。

エニユソルフオス 君の嗅覚はなかなか鋭いね。ついでだからその話をしよう。人間が生きていくために不可欠なものは。

アイヌーシュ まず、空気です。血液を通じて脳へ送られる酸素が二分

も途絶えたらお陀仏です。

エニュソルフォス それから。

アイヌーシュ 水です。水だけでも一週間位は生きられるという話を聞いたことがあります。三日間一滴の水も飲まなかったら完全に脱水症状になり、生命が脅かされます。

エニュソルフォス それから。

アイヌーシュ 食べ物です。空気や水のように絶えずなくてはならないという程ではありませんが。断食の健康法や修行がある位ですから、病気によってやむを得ず、あるいは自発的に一定期間食物を絶つことは可能です。

エニュソルフォス 食物はどこから得られるかね。

アイヌーシュ 筍や栗の実、貝などのように採集によって得られるもの、魚や野生動物のように狩猟によって得られるもの、穀物や野菜のように農耕によるもの、肉や乳製品のように牧畜によるもの、と様々です。

エニュソルフォス 人類はざっと太古の時代からそのようにして食物を手に入れきたのだろうか。

アイヌーシュ いいえ、そうではありません。一番始めは採集生活を営むしかありませんでした。やがて狩猟が加わり、更に時代が下がって牧畜を主とする遊牧民が現れ、今から一万二三千年前に最終氷河期が終わった後、農耕が次第に行われるようになりました。

エニュソルフォス 農耕の発明と普及は人類に何をもたらしたのだろうか。

アイヌーシュ 全面的に採集・狩猟に依存する不安定な生活から脱却し、比較的安定した収穫を期待できるようになりました。但し、農耕に依存する度合いが高くなればなる程、冷害、旱魃、長雨のような異常気象によって収穫が激減する危険性も高まりました。

エニュソルフォス 農耕の普及によって人間界にどんな変化が起ったのだろうか。

アイヌーシュ 穀物は長期保存が可能なため、富の蓄積が始まりました。そして土地を持つ者と持たない者の差が際立つようになりました。前者は後者を小作人や奴隷として使用して搾取し、富める者は富めるもの同志の間で闘争を繰り返しながら自分の利権集団を拡大して行き、やがて金属器の発明と相俟って部族国家が形成されるに至りました。

エニュソルフォス 人類と農耕にはそのような歴史的背景があることは確かだね。ところで、農耕を農耕たらしめているものは何だろう。

アイヌーシュ と言いますと。

エニュソルフォス 農耕がある種の可食植物に係わるものであることは言うまでもない。栽培される植物の可食部分は、種子や果実、葉の部分、根や鱗茎というようにいくつかのカテゴリーに分けられる。このことは、野生植物であっても可食部分のあるものなら、全く変わらない。栽培される植物を野生あるいは自生の植物とくらべると、どんな違いがあるだろう。

アイヌーシュ 野生あるいは自生の植物の場合は、種子が自然に落下するか、風や川や鳥によって運ばれるかして大地に達した後、外的な条件が満たされると発芽して生長し、開花結実します。それに対して、農作物の方は大地を耕して畑に種を撒いたり苗を植えたりしなければなりません。肥料をやったり雑草の除去、害虫の駆除もしなければなりません。そして場合によっては間引きしたり、脇芽を摘んだりとか添え木をしてやるという作業も必要になります。従って、農作物は人手が掛かるという点が、野生の植物と大きく異なっています。野生の植物と比べると、農作物は殆ど「人工物に近い」と言えるでしょう。

エニュソルフォス 確かに君の指摘した通り、「人為が関与するかしないか」という点だけが両者の根本的な差異と言える。だけど、農作物は果たして「人工物」と言えるだろうか。

アイヌーシュ 人為が関与しなければ、そもそも農業は成り立ちません。

エニュソルフォス 畑は人間が拵えるものだけど、そこに撒かれる種子は人工物だろうか。

アイヌーシュ いいえ。その種子をもたらしした親に由来するもので、人工物ではありません。但し、100年前の人たちが競い合っていた遺伝子組み換えのような操作を加えた場合には、種子は「人工的なもの」と言わなければなりません。

エニユソルフオス それじゃ、大地に撒かれた種子が、水とか日光のような外的条件が満たされれば発芽し、生長・繁茂して蕾を付け開花・結実するのは「人工的なこと」だろうか。

アイヌーシュ いいえ、植物が迎える一生の過程はその種子のうちに可能態として秘められているもので、いわば自然によってプログラミングされたものです。

エニユソルフオス 「プログラミング」か。君は電磁奴隷のような言葉を使うね。

アイヌーシュ い、いけませんか。

エニユソルフオス 人工物でないものに、人工物に対する見方を当て嵌めるのは感心しないな。まあ、いいや。野生の植物と比べると「人工的なもの」に見える農作物の場合も、人間が為し得るのは、「種子に可能態として備わっている一生の過程」の発現を助けてやることに限定される。このことは、昔の人たちが長い期間の交配を通じて実現させた品種改良や、近代の人たちが血眼になって行った遺伝子組み換えのようなことをした場合にも本質的には変わらない。

アイヌーシュ このシュロートラ・ダートゥでは農作物はいまだに大地で作られています。僕が育ったラシュミ・ジャーラ近郊では酸性雨と煤煙のために穀物と野菜は最早工場で生産されるものになっていました。

エニユソルフオス 温室を利用して季節外れの野菜や果物が栽培されたり、工場ですの代りに水を、日光の代わりに人工的な照明を用いて穀物や野菜が作られたとしても、農作物は本質的に人工物ではないと言わなければならない。でも、真の意味での「天」と「地」に最早依存することなく、代理物としての「陰」と「陽」の二気によって生長する農作物が果た

して「植物」の名に値するものかどうか……。難しい問題だ。僕にもよく分からないや。

汲み取りの話から始まって、「農作物は人工物かどうか」と言う問題にまで発展したけれど、少し話が逸れてしまったようだ。ピロムーサの守護神アグリコラに話を戻そう。

食物は僕たちの命を養うのに不可欠なものであり、そのうちのかかなりの割合を占める農作物を産み出す農夫の存在は重要だ。僕たち自身も少しでも農耕に従事して農夫たちの苦勞を知って感謝の心を持ち、農作物を粗末にしないで頂く。この意味で農夫が神として祀られているのは正しい。古代の中国には「神農」という名の、農業や医薬の神様がいた。しかし、アグリコラがピロムーサの守護神になっていることには、もっと別な意味が込められているのだよ。大地を耕して畑に種を撒いてそのまま放っておいたらどうなるだろうか。

アイヌーシュ 発芽したとしても、雑草がはびこって日当りを悪くしたり養分を奪ったりします。最悪の場合は雑草にまけてヒョロヒョロになったり枯れてしまいます。そこまで行かなくても、良い収穫を望むことはできません。

エニュソルフォス その通り。丁度それと同じことが我々の心についても言えるんだよ。「アグリコラ」の語源は知っているかい。

アイヌーシュ 「アゲル (ager、畑)」と「コロー (colo、耕す)」に由来する言葉です。

エニュソルフォス よく知っているね。我々は「心の農夫」にならなければならない。我々の心は畑に喩えられる。畑を手入れしないで放っておけば雑草が茫々に生い茂ってしまうように、我々の心も放っておけば暗闇に覆われてしまい何も育たない。だから、我々は心の畑を耕して地中に埋もれている、「響和や美しい響きに対する感性」を掘り起こし、それを大切に育んでやらなければならないんだ。

アイヌーシュ なーるほど。そういう意味だったのですか。

エニユソルフオス さあ、中に入ろう。寝室は二階の屋根裏部屋にあるんだよ。この廊下の突き当たりの階段をあがった所に…。おやつ、マヤおばさんが帰っている。挨拶しておこう。

エニユソルフオス マヤおばさん、今日また新入生が来ました。アイヌーシュ君です。

アイヌーシュ こんにちは。アイヌーシュといいます。よろしくお願ひします。

マヤ 何と言う名前だって。よく聞き取れやしない。

アイヌーシュ アイヌーシュです。

マヤ 「アイヌーシュ」。このシュロートラ・ダートウじゃ聞いたこともない変わった名前だね。どこから来たのかい。

アイヌーシュ ラシュミ・ジャーラから来ました。

マヤ 「ラシュミ・ジャーラ」というと、あの…。

アイヌーシュ そうです。

マヤ どおりで。随分遠いところからやって来たね。何十日もかかっただろう。

アイヌーシュ はい。

マヤ あんたで何人目になるだろう、この学院に入って来た子は。最初に来たのがフォルミウス。三月月も経たないうちに逃げ帰ってしまった。次に来たのがイムペディートゥス。この子は少しましだったけれど勉強が難しく半年で出て行ってしまった。三番目にきたのがエニユソルフオス、あんただったね。あんたは辛抱強いし、その上頭もよくて今日まで続けられた。いまじゃ、この学院でオクセクナルフ先生の片腕のような存在。よく続けられたね。本当にあんただけだったよ。今年で何年になるかね。

エニユソルフオス 10年目です。

マヤ もうそんなになるかね。月日の経つのは早いものだよ。あんたの次にやって来たのがモルティヌス。あの子は甘やかされて育った世間知ら

ずのお坊っちゃんで一ヶ月もしないうちに逃げ帰ってしまった。五番目に来たのがペンタゴース。角張った顔した意地っ張りな子だったけれど、四ヶ月はいただろうか。最後はオクセクナルフ先生と喧嘩して出て行ってしまった。六番目に来たのがセクストゥス。頭のよい子だったが、三ヶ月経ったところで親が連れ戻しにやって来て強引にやめさせられてしまった。本人はやる気だったのに可愛そうだったね。七番目にやって来たのがフォルトゥナートゥス。名前とは裏腹に運の悪い子で、しょっちゅう怪我ばかりしていて、結局二ヶ月経ったところでやめて帰ってしまったよ。八番目に来たのがオクタヴィアーヌス。名前ばかり記憶に残っていて、何だか影の薄い子だった。まだ一ヶ月経ったばかりの時に「やっぱり普通の音楽が勉強したい」とかなんとか言って出て行ってしまった。九番目に来たのがノニウス。丁度この間の戦争が勃発した年にやって来た子だった。苦労を厭うズボラな子でね。文句ばかり言って仕事をサボっているの、二週間過ぎた時オクセクナルフ先生に退学処分にされたよ。八番目の子がやって来た頃からだっただろうか。世の中がな一んかおかしくなってきたみたいだね。子供がまるで忍耐力をなくしたようになってしまっさ。それで、十番目にきたのがあんただよ、アイヌーシュ。あんた何だか寂しそうな顔しているね。ここはお世辞にも楽しいところじゃないよ。あんたはいつまで続くかね。ウイッヒッヒッヒッヒッ。

〔アイヌーシュ 嫌なことをつけつけというばあさんだな。待てよ。この笑い声はどこかで聞いたことがある。どこでだっただろう……。思い出せない。〕

マヤ 朝食は七時、夕食は五時だよ。洗濯は水汲み場の外でして、軒下にある物干に干すんだよ。夕食までまだ大分あるから、お茶とお菓子をおあがり。

アイヌーシュ ありがとう。

エニュソルフォス それじゃ、寢室を案内しよう。マヤおばさん、ごち

そうさま。

アイヌーシュ ごちそうさまでした

エニユソルフオス 君には嫌なことを言ったかも知れないけど、あのおばさん、とても気のいい人なんだよ。

アイヌーシュ そうなんですか…。

エニユソルフオス 階段は暗いから、足下に気を付けて。天井に頭をぶつけないように。屋根裏の二階が僕たち生徒の寝室兼勉強部屋になっているんだ。ここが僕の部屋。向かいが君の部屋になる。あと小部屋が六つあるんだけど、みんな菓草置き場になっているよ。ほら。ちょっとドアが重いけど。もう大分長い間使われていないから、窓を大きく開けて部屋の空気を入れ換えるといい。明日はきっと晴れるからベッドの布団を陽に当てて干せるよ。

アイヌーシュ どうして明日は晴れるって分かるんですか。

エニユソルフオス 滝の音で分かるんだよ。

アイヌーシュ へーっ。滝の音で天気まで分かるんですか。

エニユソルフオス そう。昼間は窓を閉めると滝の音は殆ど聞こえて来ないけれど、夜になると結構聞えるんだ。風向きにもよるけれどね。多分、最初のうちは苦になるだろう。夜通し雨が降り続けているみたいで。音楽好きの人は耳が敏感だからね。でも、じきに慣れるよ。慣れてくると滝の音がとてもいい響きに感じられるようになるだろう。ベッドに入って滝の音に耳を傾けていると、心が安まっていつのまにか眠ってしまう。オクセクナルフ先生の用事で他所に出掛けてそこに泊まる時なんか、この滝の音が聞こえないので却って寂しくなる位だ。

新入生のすべき仕事は一目で分かるように一覧表にしてドアの内側に貼ってある。もし何か分からないことがあったら、僕かマヤおばさんに尋ねてくれ給え。それから、マヤおばさんの言った通り、ここは寂しいところだ。もしどうしても寂しくてたまらなくなったら、滝のところへ行ってみるといいよ。滝の響きの中から自分が聞きたいと思っている人の声が

聞こえて来るから。寂しさに耐えられるようになって心が落ち着いてくると、段々ここが聴覚的には極楽のようなところだということが分かってくると思うよ。それまでには長い時間がかかるけどね。

それじゃ、ベッドカバーの埃を払ってから少し横になるといい。夕食まではまだ時間があるから。

アイヌーシュ はい。エニユソルフオスさん、色々と教えて下さってありがとうございます。

あー、よかった。遥々ここまでやって来た甲斐があったというものだ。それにしても「スコラ・ピロム・ソールム」がこんなに風変わりな音楽学校だとは夢にも思わなかった。オクセクナルフ先生は体格も立派だし太っ腹の人らしい。でも、「テルミンならひける」と答えた時、どうして急にあんなに怒ったのだろう。それに、先生の話は難しくてよく分からない。そのうちに分かるようになって行けるのだろうか.....。エニユソルフオスさんは優しく落ち着いている。亡くなった兄さんのような感じの人だ。あのばあさんも言っていたけれど、余程頭の切れる人なのだろう。

それにしても、疲れたな。明日からこんなに沢山の仕事をこなしていけるのだろうか。掃除、水汲み、薪割りと焚き付け拾い、草取り、汲み取りまで...。発声練習もしなくちゃいけないし。うーん。横になったら急に眠くなってし.....

第2章終り（第Ⅱ部続く）

2005. 9. 26.

愛好樂神學院 (SCHOLA PHILOMUSORUM) 第Ⅱ部 音樂少年埃奴虛 (Ainuxu) 的修煉

原 正 幸

第Ⅱ章 (摘要)

幾十天的艱苦之后找到「愛好樂神學院」的埃奴虛、經過院長沃色納爾夫 (Ocsecnarf) 的面試、得到入學許可、但是定為使做每天學院的雜務和練習發聲。然后他被將當師哥的艾女寰兒夥 (Enysorphos) 陪同遊覽學院內部、一邊聽對於雜務的說明、一邊和他討論圍繞練習發聲的意義、農耕的重要性、和祭祀農工神Agricola (愛好樂神聖人Philomusa的四守護神之一) 的理由。通過對話他想到這箇音樂學院不是尋常的、而是好象一種道場似的、其目的在於實踐由于現代文明發展喪失的<人之響和>的復原。